

「民度」は一日にして成らず

# まずは誠実な議論をする土壌から

西洋と日本の一番の違いとは何だろうか？

それは言葉を尽くして議論をする姿勢が、あるか・ないかだ。

「弁論」を用い、議論しつくす西洋と、「以心伝心」や「腹芸」の日本。

ローマ史研究の第一人者・本村凌二さんに聞いた。

東京大学名誉教授  
**本村凌二**

●もとむら・りょうじ 1947年熊本県生まれ。一橋大学社会学部卒業、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。東京大学、同大学院、早稲田大学などで教授を歴任。専門は古代ローマ史。『地中海世界とローマ帝国』（講談社）、『教養としての「世界史」の読み方』（PHP 研究所）など著書多数。

## 古代ローマは弁論が命

——ローマ帝国を足がかりにして、二十一世紀の日本を語っていただきたいと無茶なお願いをしたわけですが、まず「弁論」で名高いギリシア・ローマでの言葉の力です。日本は政治の世界などを見ると、言葉を尽くして語ることをおろそかにして

いると感じるのですが……。

日本は聖徳太子の時代から「和をもって貴しとなす」でやってきたから、論争が苦手ですね。議論になると、すぐ「勝った」「負けた」になってしまいがちです。欧米では小学校ぐらいから、言葉で人に考えをしつかり伝える訓練を受けます。西洋では人前で自分の意見をはっきり述べるのは非常に重要なことでした。

し、そうした態度はごくごく当たり前とされています。

西洋文明は古代ギリシアや古代ローマから出発しています。どちらも大衆社会に近いところがあり、その中であって弁論は非常に重要でした。テレビも新聞もありませんから、人々を説得するには言葉を尽くすしかなく、政治家は弁論術に長けていなくてはならないのです。

ギリシアの知識人となると、日本

ではアリストテレスが有名ですが、紀元前四世紀当時、人々の間で圧倒的に知られていたのは弁論家デモステネスです。デモステネスはアリストテレスと同じ年に生まれて、同じ年に亡くなっているのですが、マケドニアのギリシア世界への影響を危惧して徹底抗戦を主張し、アテネがマケドニアに敗れたあとも反マケドニアの立場を崩さなかったことで、結局は不運な運命をたどった政治家です。

彼はもともと滑舌が悪く、弁論では不利でした。そこで口の中に小石を数個入れ、海辺で大声を出して話す訓練をするといった驚くべき努力をしています。それほどまで言葉で人を説得する能力を身につけなければ優れた政治家にはなれなかったのです。

デモステネスから二百年ほど後に

出てきたローマのキケロも、デモステネスのような弁論家になることを目指していました。彼は長い演説を流暢に続けることを得意としていたのですが、人々に人気があったのはカエサル（ジュリアス・シーザー）でした。

カエサルは、人の胸に響く短い言葉で的確に伝えることが上手だった。「来た、見た、勝った」「賽は投げられた」といった、いわゆる「ワンフレーズ」というやつですね。

いずれにしても人を説得するための弁論の力を持つていることは、政治家の第一条件でしたし、その流れを汲んでいる西洋社会も、言葉で人を説得することこそ最重要だとの意識が強い。小さい頃から議論のやり方を訓練するのも、そうした背景があるからです。

## 日本の議論は議論にならない

いっぽう日本は、言葉を尽くして意見を述べ合うという訓練もしないし、以心伝心に価値を置く社会です。明治時代初期から、西洋の文明を積極的に取り入れ成功してきましたが、政治の根本に関わる部分、つまり「言葉によって人を説得することこそ最も重要だ」との意識は、積極的に取り入れなかった。

市井の人たちの中にも、「立て板に水、饒舌な奴は信用できない」といった感覚があります。だから議論するという土壌も生まれにくい。

議論で負けると、自分の人格を否定されたと受け取って意固地になったり、負けたくないから議論そのものを回避しようとしたりする。腹芸も多いように感じます。